

とを目指します。本書は、そういった英語教育を実現するための方策を、具体的な活動事例を示しながら提案するものです。

本書が紹介する、英文への記号付与やグラフィック・オーガナイザー、言い換え作文といった個々の活動を見れば、それほど目新しいものばかりではありません。しかし、大切なことは、それらの活動が人間形成的アプローチという全体像の中で有機的に位置づけられているということです。

学習意欲の低い生徒への対応に疲れ、あるいは進学実績などの数値目標ばかりを迫られることに虚しさを感じる教員にとって、本書は、学校で英語を教えることの価値を改めて確認し、姿勢を立て直す指針を与えてくれることでしょう。

〈書評〉本誌 15. 01

●山田昇司 (著) 『英語教育が甦えるとき』(明石書店, 2014年9月刊, 343pp, 2,500円)

上の三浦(2014)と、具体的アプローチはまったく異なるのに、読者に対するメッセージにおいて不思議と同調してくるのが本書です。書名も装丁も、同出版社から出されている寺島隆吉(2009)『英語教育が亡びるとき』とそっくりで、続編かと思間違ふほどです。それもそのはず、本書副題は「寺島メソッド授業革命」。本書著者は寺島隆吉氏に師事し、その思想や方法論を自らの英語指導の中で具現化させている実践者です。ただ、寺島(2009)が政治的メッセージを多分に含んだ英語教育論であるのに対し、本書は、政治的な議論も含みつつ、より具体的な実践の紹介と、実践に至る経緯についての著者の省察がミックスして語られる実践記録の性格が強いものです。中でも、著者の英語教師としてのライフ・ヒストリーにも関わる省察の部分は生々しいエピソードが豊富で、同業者として身につまされる話もあり、本書の大きな特長となっています。

序章で著者は言います。

英語教師はありもしない幻想でしかない「実用性」という呪縛から少し自由になって、英語を

学ぶことの「すばらしさ」「楽しさ」「おもしろさ」が感じられるような授業づくりをもっとした方がいいのではないのでしょうか。長い目で見ても結局はその方が「実用力」もつくと思います。人は学ぶことの意味を自覚しそれを楽しいと思ったときにだけ学び続けることができるからです。(p. 25)

そして、そのような授業づくりの具体例として、「セン・マル・セン」の記号づけによる語順指導と「リズムよみ」による「英音法」指導という「基本中の基本」(p. 152)に焦点を絞ったシンプルな指導が提案されます。その一方で、扱う英文の内容については、学習者(本書の場合は大学生)の知的レベルに合ったものとするのが強調されます。その根底には、直接的実用性のみにとらわれず、「人間教育」という、より高次の目標を掲げるに至った「近代教育の原則」(p. 163)を尊重する著者の教育観があるわけですが、それがシンプルな指導法と合わさることで、「基本的なのに知的レベルが高く、楽しい」授業づくりが可能になると著者は説きます。当世風の「おしゃれ」な授業ではありません。しかし、英語が決して得意とは言えず、好きでもなく、英語学習に実利的価値を見出してもいない生徒・学生たちから学習意欲を引き出し、「教室から出たあとでも、単位には関係なくとも、みずから進んで学んでいく」(p. 301)ように育てている著者の言葉には説得力があります。

また、「リズムよみ」の身体性の指摘(p. 72)や生徒にとって切迫した問題を扱うことの必要性(pp. 140-141)、さらには「おい、山田」と話しかけてきた学生への対応のエピソード(p. 303)などからは、様々な専門知識や職業経験と1人の教員の人格が統合・融合されているさまが垣間見え、時に率直に吐露される心情とも相俟って、非常に生々しいダイナミズムを感じます。「環境を整え、学習者が自ら学びに向かうべく変容することを信じて、英語のコアを徹底して教え続けるべし」そんな強いメッセージを私は読み取りました。

* * *

本を読むことは先人の時間と労力をお金で買うこと。先人の蓄積を受け継ぎ、地道にマジメに「次の高み」を目指しましょう。

* 本の価格は本体価格です。